

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 16 日現在

機関番号：12301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652106

研究課題名(和文) エスチュアリ英語の拡がり及ぼす英語意識の変容を探る

研究課題名(英文) Estuary English and the Language Change in English

研究代表者

柴田 知薫子 (SHIBATA, Chikako)

群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号：10296204

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：1980年代にイギリス英語における容認発音の威信が低下し、ロンドンの若年層の間にエスチュアリという新たな社会変種が浸透した。本研究は、エスチュアリがリンガ・フランカとしての英語のモデルとなり得るかどうかを調査する目的で行われた。2011年にロンドン大学で20歳代女性から言語資料を採取して分析した結果、日本語話者にとって望ましくない音韻変化が生じていることが明らかになり、エスチュアリ英語はリンガ・フランカのモデルには適していないと結論付けた。さらに2013年にシェフィールド大学で開催された社会言語学会では、エスチュアリ英語がすでに過去の流行となっていることが確認された。

研究成果の概要(英文)：The prestige of Received Pronunciation has been declined since 1980s, and a social variety called Estuary has emerged and permeated among younger speakers in London. We started the present study in order to decide whether Estuary English could stand as a most influential model of English as a Lingua Franca (hereafter ELF). In 2011 we took linguistic data for analysis from female participants in their 20s, who worked at University College London, and found several linguistic changes undesirable for Japanese students of the English language. Therefore, we concluded that the Estuary variety could not be suitable for the model of ELF. Furthermore, it was confirmed that Estuary English had already been old-fashioned at the Conference on Language Variation and Change held at the University of Sheffield in 2013.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英語学

キーワード：Estuary English Lingua Franca Language Change Language Variation エスチュアリ英語 リンガ・フランカ 言語変化 言語変異

1. 研究開始当初の背景

(1) 20 世紀前半の英語の標準はイギリス英語であり、イギリス英語の標準は容認発音であった。20 世紀の後半になると容認発音の威信が低下し、1980 年代にはエスチュアリと呼ばれる新たな社会方言が生まれた。一方、日本を含む東アジア諸国では、アメリカ英語を標準として教育課程に英語を導入している。

(2) 21 世紀に入り国際化が急速に進んだ結果、英語を第二言語または外国語として習得または学習する人の数が母語話者の数を大きく上回るようになった。英語を第二言語としているインドやシンガポールでは、新たな標準がすでに確立している。英語を外国語として学習している日本では、事実上アメリカ英語に標準を依存する現状に変化はない。

2. 研究の目的

(1) エスチュアリ英語がイギリス英語の新たな標準となり、容認発音に代わる国際標準となり得るかどうか、現地で言語資料を採取して音声分析すると同時に、容認発音とエスチュアリに対する英語母語話者の意識を調査すること。

(2) 国際化の進展が今後も進むことを前提として、英語の非母語話者がリング・フランカ(共通言語)として無理なく習得し、使用することのできる英語の標準を探ること。

(3) イギリス英語やアメリカ英語といった特定の地域標準への依存を脱し、自然言語では避けることのできない変化や変異に耐える国際標準を確立することが可能かどうかを検証すること。

3. 研究の方法

(1) ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ主催の音声学セミナーに参加し、イギリス英語の現状を観察すると同時に、エスチュアリ英語の話者から言語資料を採取し、帰国後に音声分析を行った。

(2) 音声分析の結果を精査し、日本語話者にとって学習不可能な要素が含まれていないかどうかを検証する一方、Jenkins (2000, 2007, 2009)によって第二言語圏における標準英語の音素体系を確認した。

(3) シェフィールド大学主催の社会言語学会に参加し、英語の地域変種や社会変種を考察すると同時に、イギリス英語における容認発音とエスチュアリの社会的な位置付けを確認した。

4. 研究成果

(1) 平成 20 年 3 月に告示された中学校学習指導要領には、英語教育における言語材料と

してふさわしいのは「現代の標準的な発音」であると記されているが、教科書に付属する音声教材が一般米語で録音されているため、少なくとも公立学校では事実上アメリカ英語を標準としている。アメリカ英語は発音に関して保守的であるから、これを標準とする教育政策は合理的と言えるかもしれない。

(2) 一方、イギリス英語は容認発音を除くと 20 世紀以降も音韻変化を続けている。20 世紀の後半には威信言語であった容認発音の相対的な地位が低下し、1980 年代にはロンドンの若年層の間にエスチュアリと呼ばれる新たな社会方言が生まれた。この変種は二重母音の体系的な変化を特徴としている。

(3) 英語の母音は 10 世紀から現在に至るまで絶えず変化を続けている。自然言語としての英語が変化を避けることができないとすると、母語話者による自然な音韻変化を先取りしたエスチュアリ英語にはリング・フランカのモデルとなる可能性があるのではないかと、という期待から本研究は出発した。

(4) 2011 年 8 月、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジで開催された音声学セミナーに参加して講師の指導助言を得、エスチュアリ英語話者と認定された大学院生(20 歳代女性)3 名から言語資料を採取した。録音は大学の地下にある遮音された教室でオリンパス製の ICレコーダーを使って行った。音声分析をする前に筆者の聴覚判断によって発見された特徴は以下の 5 点である。

高母音 /i:/, /u:/ がそれぞれ /ei/, /eu/ へと二重母音化し始めている。*

二重母音 /ei/ が /ai/ の方向へ推移している。

二重母音 /ou/ は第一要素が後舌化している。**

二重母音 /ea/, /oa/ はそれぞれ /e:/, /o:/ へと単母音化している。***

後舌低母音 /a/ は円唇性が強い。****

このうち は非母語話者にとって不都合な変化であり、 と は日本語話者にとって有利な特徴である。

は 1500 年前後に生じたいわゆる大母音推移と全く同じ過程で、綴字との乖離がますます拡大している。

は の変化に伴う推移で、やはり綴字との乖離が拡大する方向にある。

の変化は中舌化という容認発音独特の特徴を消し、アメリカ英語との共通性が得られるため日本語話者にとって学習しやすい。

の変化は、外来語として日本語に定着した「チェア」「ドア」といった語形と矛盾する。

の特徴によって日本語話者には「オ」に聞こえるため、「ア」に相当する母音が 3 種類あるアメリカ英語に比べて学習の負担が減る上、綴字との整合性も得られる。

(5) 被験者の中でエスチュアリの特徴を最も顕著に示す女性の発音を AcousticCore8 を使って分析した結果、 の第一要素のフォルマントは以下の通りである。

	F1	F2	F3
/i:/			
speech	449	2724	
machine	449	3049	
Japanese	427	3025	
/u:/			
music	576	2197	3130
school	599	1861	2346
/ei/			
same	476	3064	
place	911	2913	
/ou/			
old	457	1418	4212
coat	735	2985	4288

Gimson's Pronunciation of English (2014: 105)と比較すると、/i:/ (F1=303)と/u:/ (F1=328)の第一要素は明らかに舌の位置が下がっており、二重母音化が進行していることがわかる。これに対して/ei/と/ou/の第一要素は、同じ被験者の中でも語によって揺れが見られるが、place や coat の第一フォルマントからは舌の位置が下がっていることがわかる。後者の変化は前者の二重母音化に伴う連鎖的推移であり、この流れは自然言語としてのイギリス英語では止めることができないものと予測される。

(6) の変化は、1500年前後に生じたいわゆる大母音推移の初期の過程と同じであり、ee/ea, oo という綴字との乖離がますます拡大する方向にある。これは非母語話者は言うまでもなく、母語話者にとっても不都合な変化である。とくにイギリス英語話者の間では世代間の発音の差が大きく、旧世代の話者からは「goose と geese の区別がつかない」という証言も得られた。

の変化は、南半球の英語で早くから観察されているが、a という綴字を[ai]と読ませることになり、合理性に欠ける。このような方言では、推移した母音との併合を避けるために、本来の/ai/の第一要素も連鎖的に推移しており、非母語話者の学習可能性が損なわれる。

の変化は、若年層に広く観察される。第一要素が中舌化した/ou/は容認発音の特徴であるがゆえに近年は社会的に敬遠される一方、エスチュアリの発音は/ou/よりも/au/に近くなっている。筆者の聴覚判断とは異なり、第三フォルマントの値から円唇性の弱さが観察される。この変化はmouthの/au/との混同をまねく恐れがあるため、非母語話者にとって有利とは言えない。

の発音は、年長のイギリス英語話者の間にも定着している。19世紀に母音の後の/r/が消失して残ったschwaが長音に変化したもの

で、母音の後の/r/が現在も発音されているアメリカ英語には観察されない。「チェア」「ドア」のようにschwaを「ア」という母音に置き換えて借入した日本語話者にとっては、違和感のある発音である。

の特徴は、エスチュアリの後舌低母音に円唇性が保たれている証拠である。日本語話者には明らかに「オ」に聞こえるため、綴字との整合性が得られ、円唇性を失ったアメリカ英語の後舌低母音よりも学習可能性が高い。

(7) 観察結果から、 は日本語話者にとって不利な特徴を、 は有利な特徴を示していることがわかる。日本は、英語を第二言語として「習得」しているのではなく、外国語として「学習」している地域に分類されている。そのような地域では、アメリカ英語がイギリス英語のいずれかに標準を依存してきた。しかしながら、アメリカ英語にもイギリス英語にも、日本語話者にとって学習可能な特徴と学習困難な特徴が存在することが明らかになった。

(8) Jenkins (2000, 2007, 2009)によると、英語を母語として習得する人と、第二言語として習得する人の数は等しくなり、第二言語圏では新たな標準が確立している。これまでのように、特定地域の母語話者をモデルとして学習することは合理的とは言えない。日本語話者にとって学習可能性が高く、なおかつ英語の母語話者にも非母語話者にもわかりやすいモデルを模索する時である。

(9) 英語は古来6母音に長短の区別を掛け合わせた母音体系を持っていたが、中英語期から近代英語期における大規模な変化を経て長短の区別があいまいになり、母音体系が見かけの上では複雑化した。しかしながら、本来は6種類の母音が区別できれば意味の区別ができるのである。教育現場では、日本語の母音体系にはない音素を明示し、発音が綴字から離れすぎないように工夫したい。

(10) 非母語話者が母語話者と同じ英語を目指すのは、もはや効率的とは言えない。母語の影響を残しながらも、コミュニケーションに支障のない英語の標準を確立するためには、文法的に機能していない特徴を削ぎ落とし、ある程度までは人工的に合理性を追求すべきである。人工言語エスペラントの普及は失敗に終わったが、自然言語に由来するリンガ・フランカの確立は十分に可能である。

*ここでは IPA 記号が使用できないため、厳密な音声表記とは異なる。e は schwa に相当する。

**同上。o は schwa に相当する。

***同上。a は schwa に相当する。

****同上。a は turned script a に相当する。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

柴田知薫子、イギリス英語の現状と英語教育の方向性、群馬大学教育学部紀要、人文社会科学編、査読無、第 62 巻、2013、97 - 103

SHIBATA Chikako, An Optimal Vowel System for Japanese ELF Learners, 群馬大学教育学部紀要、人文社会科学編、査読無、第 64 巻、2015 (印刷中)

[学会発表](計 件)

[図書](計 件)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柴田 知薫子 (SHIBATA CHIKAKO)

群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号：10296204

(2) 研究分担者

渡部孝子 (WATANABE TAKAKO)

群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号：90302447

(3) 連携研究者

()

研究者番号：